

## 7. 寺と仏教行事

芦 田 裕 香

1. はじめに
2. 西谷地区の浄土真宗についての概要
3. お寺の年間行事
4. 徳性寺の報恩講の様子
5. 考察
6. おわりに

### 1. はじめに

私が今回の本調査の際にまず興味を持ったのは、聞き取りを進める中でところどころに出てくる「ホンコサン」という言葉で、聞いてみるとそれは仏教行事の報恩講を表す方言であった。事前の文献調査で名前くらいは知っていたものの、少し訛って土地に馴染んだその言葉は、単なる仏教行事というよりはもう少し生活に密着した響きを含んでいるように思えた。そしてこれまでお講というものに参加したことがない私は、報恩講の名前を耳にするたびに、それがどのようなものなのか詳しく知りたいと思うようになったのである。蓮如上人が訪れた地でもあるこの西谷地区では信仰が深く、今でも寺を中心として多くの仏教行事を行っている。それは果たして人々の生活の中でどのような位置づけにあるのだろうか。本章ではまず浄土真宗、そしてその行事について述べた後、実際の報恩講について記述し、仏教行事の現状について考察していく。

### 2. 西谷地区の浄土真宗についての概要

ここではまず、西谷地区における浄土真宗についての概要をまとめていく。西谷地区には「お西」と呼ばれる浄土真宗本願寺派が多い。およその区分については大聖寺川を境目として、菅谷・下谷・我谷が西派、栢野が「お東」と呼ばれる真宗大谷派であるとされている。

寺院別の門徒構成は、菅谷では半分近くが大聖寺の専称寺で、残りは在所の徳性寺、他に福井の本覚寺の門徒、5、6軒の門徒を持つ善蓮寺となっている。下谷では18軒ほどのほとんどが福井の本覚寺、我谷は大聖寺にある専称寺の門徒となっている。栢野にはかつては栢野寺があったが、現在では小松方面の寺の門徒がほとんどで、大聖寺の願成寺6軒、小松の勝光寺3軒、本覚寺11軒で構成されている。

大聖寺の専称寺は戦国時代に焼き討ちにあったという歴史を持つ寺で、菅谷の徳性寺では130年ほど前に住職がいなくなり、5歳の小さな跡継ぎを住職にするという寺騒動があった。特に徳性寺はこの騒動より後、本門徒以外の町民も準門徒のようになっており、町全体で守っているとのことで、現在でも多くの仏教行事を積極的に行っている寺である。役員は門徒総代3名と住職を代表とした責任役員3名で、「徳性寺仏教婦人会」「仏教青壮年会」をもち、活発な活動をしている。他にもお西派である勅使村の願成寺、福井・金津の善蓮寺、山代の専光寺、専称寺と並んで加賀江沼一帯を取り仕切る大きな寺である小松の勝光寺などがある。栢野のように地域の寺がない場合など、お勤めなどの際に遠方の寺が出先機関として利用するための門徒の家で「道場」と呼ばれるものもある（道場については8章、9章を参照）。

お東・お西の目立った違いとしては、仏壇の造りが挙げられた。東派は、屋根が一重で曲線、輪灯が菊型で、花入れやろうそく立ては金ぴか色をしている。西派では屋根が二重で真っ直ぐ流れ落ちる形、輪灯は棒型をしており、梨子地色である。どこの家でも立派で大きい仏壇を持っているが、これは西谷地区、特に菅谷に特有のもので、山中の街中ではあまり見られない。理由として考えられるもののひとつに、街中の人々は公民館のような場所にある大きな仏壇を利用するためそれぞれの家に大きな仏壇を置く必要がないということがある。西谷では公民館などではなく「道場」と呼ばれる家に人々が集まったため、立派な仏壇が家庭にも必要とされたのである。お互いの家の仏壇を見る機会が多くあるために、より立派な仏壇をと競い合った結果大きいものが増えたのではという意見があった。

### 3. お寺の年間行事

以下、菅谷の徳性寺で行われている年中行事を例に、行事の概要について説明していく。

表1 年間行事一覧表

1月	1日 13～16日	元旦会 御正忌報恩講 (13日：若い衆お講、14日：尼お講、15日：子どもお講、16日：ご満座) ●ご消息お講・・・1日もしくは16日に御消息を読む
2・3月 → 16日の共同お講、25日の仏教婦人会例会のみ		

4 月	16 日	御忌 ●ご消息お講（兼 共同お講）
5・6 月 → 16 日の共同お講、25 日の仏教婦人会例会のみ		
7 月	15・16 日	永代経法要（新盆）
8 月	15 日	お盆（追悼法要） ・お盆は 8 月 13～16 日もしくは 14～16 日のうち一回行う
9 月	16 日	●ご消息お講（兼 共同お講）
10 月 → 16 日の共同お講、25 日の仏教婦人会例会のみ		
11 月	9～11 日	お取り越しの報恩講 ・1 月 9～11 日 本願寺で行われる報恩講を先取りして行われるもの
12 月	16 日	●ご消息お講（兼 共同お講）

毎月の行事として 16 日の共同お講、25 日の仏教婦人会例会がある。

ご消息お講は年に 4 回（1・4・9・12 月）、月行事の共同お講を兼ねて 16 日に行われる。

（聞き取りから筆者作成）

## （1）報恩講

親鸞聖人の命日に行われるお勤めで、浄土真宗で最も重要とされているものである。門徒みんながお寺に集まって行い、正信偈や恩徳讃を唱える。もともとは、親鸞聖人の三十三回忌に覚如上人が彼を称えて書き記した言葉「報恩講私記」（「私記文（シキモン）と呼ばれる」）を読むことが報恩講の始まりとなったと言われている。

特に 1 月 13 日から行われ、16 日を満座講とするものが御正忌報恩講と呼ばれる。この地域では、年が明ける前の 11 月に、それを先取りして行われる「お取り越しの報恩講」が大きな行事となっており、2 日前の 11 月 6 日から準備が行われる（表 2）。

表 2 お取り越しの報恩講 全体日程

6 日	準備開始、仏具の真鍮を磨く「磨きもの」
8 日	漬け物の準備
9 日	午前は準備、午後・夜の 2 回お勤めを行う。
10 日	午前・午後・夜の 3 回お勤め。お昼には「総おとき」を食べる
11 日	御満座。午前で終わり、片付ける。

（聞き取りより筆者作成）

11～12 月にお坊さんが各家を回る「お回り」は、仏壇の報恩講（ホンコサン）と言われる。お花と線香だけを供えるお盆と違い、赤ロウソク・飾り・お菓子・餅や亡くなった人の嗜好品等で飾りつけをする。

## （2）共同お講

徳性寺・専称寺・願成寺・本覚寺で戦時中から共同して行われているお講である。場所は徳性寺で、毎月 16 日に行われている。御消息お講や報恩講などがある月には、一緒に行われる形となり、特に別の日にずらすといったことはされない。

### (3) ご消息お講

1878（明治 11）年に本願寺が各地のお寺・門徒・菅谷同行中などに送った手紙をご消息といい、徳性寺がそれを受け取った記念に始められたお講である。在所全体合同で行われる。御消息を開くのは1月だけである。お講の内容自体は、共同お講と同じ。

### (4) 尼（カカ）お講・若い衆（シュ）お講・子どもお講

菅谷の町内行事として、檀家に関係なく徳性寺のお御堂で行う。内容は共通して、お勤めをしてからおとき（お斎）を食べる、というものである。若い衆お講は26歳までの男性（青年会のメンバー）が参加するもので、夜に行われる。尼お講は女性のみで参加で、昼からおときの準備をし、18時ごろからお勤めをする。子どもお講は、保育園から小学校くらいの年齢の子どもが親とともに参加し、米持参でおときを作る。（カレーなど、昔は野菜も持参。）子ども用のビデオ、話を見せる。その後正信偈を唱えて勤行する。準備として夏休みの1週間、ラジオ体操の後にお経の練習をさせる。

### (5) 満座講（ご満座）

1月16日の親鸞聖人の命日（お東では12月28日）に行われる。門徒ごとに道場役の家へ行き、お坊さんも呼んでお経をあげる集まりで、「総会」と呼ばれる。その後は食事、前日までは精進料理だがこの日は魚が出る。（現在では新年会のようになっている。）昔はこの日にオヤジお講を行っていたそうである。

### (6) 御忌

蓮如上人をしのんで行うお勤めで、下谷にもある。本来は3月25日であるが、月遅れで4月25日に行く。

### (7) 永代経

「永代に渡って仏法が続きますように」と祈るというのが元々の意味である。7月15・16日の2日とも午前・午後にお勤め（講師を呼ぶ）、説教。お葬式の時には喪主が故人の代わりに懇志を寺に納める。8月を旧盆とし、新盆の行事である。

### (8) お取り越しの報恩講

1月の本山での報恩講に参加する代わりに、旧年のうちに先取りして地元で行うもの。9日には加賀江沼のお寺の方々が集まる。正信偈を唱えて勤行する。10日には更に10人ほど

お坊さんが加わる。最終日は午前で終わる。

#### (9) 仏教婦人会例会・仏教青壮年会

上記の共同お講の他に毎月行われるものとして、25日に行われる仏教婦人会の例会がある。仏教婦人会には菅谷全体で1軒につき1人の婦人が入るものと定められており、他所から来た人でも参加できるものである。会長・書記・会長の3役があり、夏休みのラジオ体操後に子ども達に正信偈を教えることもする。

また、25～66歳までの男性が入っている仏教青壮年会というものもある。これは一年に一回5月に一泊ほどで古寺を参りに行ったり、夏には研修会としてお寺参りや講演を聴くことをしたり、冬には講師の僧を呼び講演会を開くといった活動をしている。先に挙げた仏教婦人会も同じような活動をしているとのことである。

上記で挙げた年間行事以外にも、生活に密着した宗教行事として行われているものには以下のようなものがある。

##### (1) 左義長

「さぎっちょ」と呼ばれる行事で主に1月に行われるが、栢野では2月14日にスキー場跡で行われるとのことである（6章を参照）。しめ縄や昨年の書初め、お札、正月の飾り物を集めて、一般的には神社の境内で行われる。栢野では若い衆お講の行事で、さぎっちょが終わったあと寿経寺のお坊さんと呼んで皆でお経あげをする。子ども達はさぎっちょの後には竹を持ち帰りいろりの薪にする。翌日ぜんざい（餅入りのお汁粉）を食べると健康になると言われている。

##### (2) 蓮如忌

蓮如の「御影」を京都の東本願寺から歩いてお連れする（下向）。出発は4月17日（13:30）頃、決められた74箇所の家を回り、御影（掛け軸）を仏壇に置いてお参りする。タンブツゲ（歎仏偈）をあげる。共同さん（地元の寺）も一緒に行く。帰りは5月2～9日に8日間かけて同じことをする（上洛）。

出発の日は全国から人が集まる。決められて参加している人もいるが自主参加もいて、「お供」として皆で行く。2007年現在で344年目になる行事である。

##### (3) お招来（オショウライ）

若い衆お講の行事。送り火と虫送りを兼ねて下流から上流に向かって歩く。虫送りの意味

と、霊を送る意味を持っている行事である。大聖寺川近くに竹を組みわらを積んだ“大たいまつ”に火をつけかがり火とし、そこから2m～2m40cmほどにもなる竹の中にスギの葉とわらを先端につけた“小たいまつ”を持って田の用水の周囲をまわり歩いていく。最後は小たいまつを加美谷用水につけて終了する。終わった後はお宮で盆踊りをする。15、6年前まで行っていた。(30年ほど前から、夜に火をつけるのが禁止になった。)“小たいまつ”から煙が良く出るようにしたのは「華やかにしたい」という意味。

#### (4) お盆・地藏盆

菅谷では、カラスの被害を考慮して、お墓参りでは花や線香を添える程度である。食べ物は備えたとしても持ち帰る。キリコのようなものはせず、仏壇でも特に何も行わない。ご開帳もしない。新盆(にいぼん)(亡くなって最初の盆)の時だけ、お墓にお坊さんと呼んで、お経を上げてもらう。菅谷のほとんどの人が徳性寺に頼むということである。8月のこの行事は旧盆(裏盆会)と呼ばれ、菅谷の人にとっての「お盆」はこちらがメインである。これと対比して7月の永代経法要(しんぼん)を新盆と呼ぶ。

下谷でも、菅谷同様、食べ物は特に供えない。仏壇は2つ扉で8月15日には開けておき、線香・お花を供える、明かりをつけておく。ご飯はゴゼンサマと言って、毎日盛る。また、ぼたもちを作ったりする。昔は、月命日に魚を食べてはいけないと言われていた。

また栢野には上下2つの清水(かみしもしょうず)にそれぞれ地藏があり、現在では1つとなっているが、昔は上下2つに分かれて地藏盆が行われていた。地藏を栢野会館の中に入れて、洗って赤い帽子と座布団で飾り、それが終わると子ども達もその会館内で遊ぶ。昔は、蝋燭を点けるぼんぼりや飾り物、ヤグラを作るのは子ども達の仕事で、中学生が小学生を指導しナタやノコの使い方を教えていた。そこで覚えた縄の結び方などを大人になって「ハサ」を作るときに役立ったり、また上下関係を学ぶ場としても大きな役割を果たしたりしていたようだ。

#### 4. 徳性寺の報恩講の様子

以下、2007年11月9日(金)～11月11日(日)に行われたお取り越しの報恩講のうち、中日である11月10日(土)のお講に実際に参加させていただいたときの様子を記述する。

お取り越しの報恩講は、9日のお昼から11日の午前中まで行われる。そのうちの日中である10日には、午前・午後・晩の3回お講が行われ、それぞれ「日中」・「速夜」・「初夜」と呼ばれる。お講は前半・後半に分かれた構成で、お経をあげた後に法話(説教)を聞くという

のが決まった形式のようであった。前半と後半の間と、また法話の途中に設けられた小休憩の際にそれぞれ1回ずつ、200円の「御明志（おみあかし）」が集められる。また、お昼には「総おとき」と呼ばれる昼食時間があり、門徒の女性によって用意された食事が参加者全員に振舞われる。これは中日であるこの日にだけ行われることであり、前の晩から約70～100人分の食事が用意されるということである。

表3 お取り越しの報恩講 当日のタイムスケジュール

	午前中	お昼	午後	夜
9（金）	準備		14：00～ 速夜	20：00～ 初夜
10（土）	10：00～ 日中	総おとき	13：30～ 速夜	20：00～ 初夜
11（日）	10：00～ 日中			

（当日徳性寺門前にあった掲示より、筆者作成）

実際に参加したのは午前「日中」の時間から午後の「速夜」までで、私がお寺に着いたのは9時45分ごろであった。お寺の門のところには提灯と旗、そして「報恩講執行」と書かれた小さな看板が立てられていた。また、門前の掲示板には報恩講の日程を示す紙が貼ってあった。それらを見ている間にも、門徒さんたちが続々とやって来る。5分前になったので中に入ると、まず「受付」を示す紙が目についた。それに従って端の廊下の方に進むと小さな受付窓があり、部屋の中にはお坊さん1～2名を交えた数人の人が座って何か打ち合わせをしているような雰囲気だった。数人の門徒さんが、「御蠟燭代」と書いてある白い包みを差し出すと、受付の側からは「粗品」と書かれたキッチンパックが渡された。それを受け取り進むと門徒さんに続いてお堂の中に入ると、もう既に満席に近い状態であった。年配の方ばかりで、若い人の姿は見られなかったように思う。席には座布団と、後ろの方には座椅子や椅子が並べられていた。男性は前の方、女性は後ろの方の席に自然に固まっており、それぞれ世間話をしていた。男性はスーツ、女性は私服が多く、手には数珠を持っている。

お堂の壁面には「御明志（おみあかし）」（＝蠟燭代）の額と名前が書かれた紙が貼られていた。これはお講の間中も、随時追加されていた。お金の額以外にも「米三升」、「ずいき（里芋の茎の部分の呼び名）」など提供物が書かれており、また在所以外から来た人の名前の横には町名も書かれていた（写真1・2）。

お仏壇も豪華に飾られており、正面に大きなものが1つ、左右の後ろにも小さな仏壇と掛け軸がかけられた祭壇のようなものが合計で5つあった（写真3）。いくつものロウソクの火が印象的で、真ん中には大きな赤いロウソク、周りや蠟燭台には少し細めの白いロウソクが立てられていた。



(左) 写真1 お堂の壁面にずらりと紙が貼られている様子

(右) 写真2 蠟燭代の額と氏名が書かれた紙

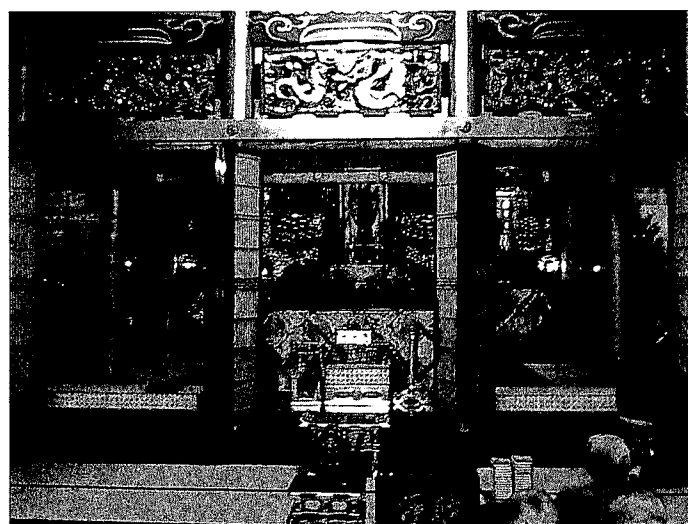


写真3 仏間を正面から見た様子

10:03頃、僧たちが入ってきて読経が始まった。後ろの方の門徒さんたちはまだザワザワしていたが、しばらくしてメインの仏壇の正面に座る「ご導師さん」が独唱し始めると、静かになった。僧の数は13名で、仏間に9名、その手前の一段低くなっているところに4名が着席していた(図1)。仏間の方の9名は加賀市の各寺のご住職で、色つきの袈裟を着用していた。導師も毎回他の寺から招かれており、今回は條性寺のご住職であった。一段低いところの4名はお役僧さんで黒袈裟を着用し、鐘を鳴らすなどをしていた。お経は正信偈とご恩徳(オンドク)を全員で唱和した。正信偈の時には多くの人がオレンジ色の「在家勤行集」を開いていた。お経の終わりの方にはまた導師さんが独唱していたが、その時周囲の僧たちが唱和しながら勤行集を額や胸にあてるような動作をしていたことが印象的だった。最後は「なんまんだぶ、なんまんだぶ」で締められた。ご導師さんはお辞儀などいくつか動作をし



た後一番に退室し、その後はご導師さんに近い席に座っていた色つき袈裟のお坊さんが左右向かい合った2人ずつ順番に退室していた。色つき袈裟のお坊さんたちは左右の後ろにあった小さめのお仏壇にお辞儀をしてから退室した。次に少し離れて座っていた徳性寺のご住職が同じように退室、手前に座っていたお役僧さんたちは最後に退室した。お役僧さんたちは退室する前に黒板などを横から持ってきて、法話のための準備をした。

これが10:30くらいで、お役僧さんたちが準備を始めたのと同様くらいに、外からカラーの棒つきザル（写真4・5）を持った人が2〜3人入ってきて、御明志を集めに回った。近くにいた方に聞いたところ、御明志の額は200円が相場と決まっているようであり、門徒さんたちは慣れた様子で小銭をザルに入れていた。

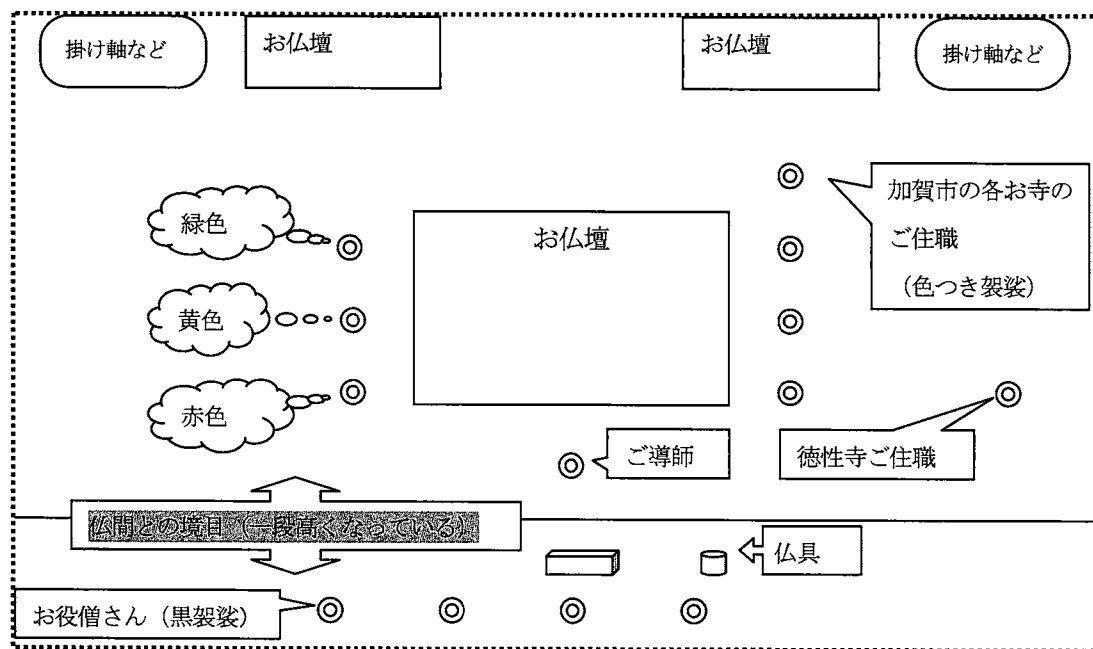


図1 2007年11月10日午前中 読経時の様子

御明志を集め終わってからも少し休憩時間が続き、門徒さんたちは世間話に花を咲かせていた。その後、徳性寺のご住職からの簡単な挨拶があり、法話の開始が告げられた。條生寺のご住職が出てこられ、お取り越しの報恩講の短い説明、そして礼賛文を唱えてから、法話が始まった。まずは雑談・最近の世の中の様子の話から始まり、それが次第に浄土真宗の教えに結び付けられるという構成で、とても聴きやすく分かりやすいものであった。

大まかな内容は、まずこの物に溢れた世の中で「衣食足りて礼節を知る」ということは本当ではないということ、どんなに傍から見て幸せそうに見えても皆同じように色々なことで

苦しむ日々を送っていること、本当の幸せとは財産・健康など浮き沈みのある部分ではない根っこの部分であるということ……などだった。阿弥陀如来はいつも側で支えてくれる存在で、南無阿弥陀仏と唱えることはその存在に気づくための行為であること、今生の幸せではなく後生に浄土に生まれる、と思って生きるということ……といった内容も、丁寧に繰り返し話された。門徒さんたち（特におばあちゃん達）は「うんうん」と相槌を打ちながら一生懸命話を聞いている様子だった。最後の方では、ところどころウトウトしている人も見られた。



（左）写真4 棒つきのザルがお堂の外の廊下の壁にかけられているところ

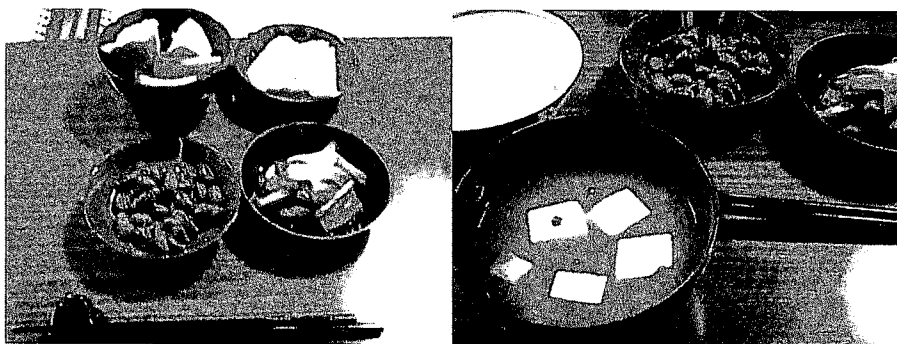
（右）写真5 御明志を集めている様子

法話の合間にも5分ほどの小休止・御明志集めがあり、その後12時頃まで話が続いたあと、また礼賛文という短い歌、「恩徳讃（オンドクサン）」の順に唱和して、法話が終わった。

その後にはお斎（おとき）をいただいた。この日は中日であったため「総おとき」と呼ばれる特別な昼食時間があり、在所の門徒の女性によって用意された食事を参加者全員でいただく。メニューは大体決まっており、お汁・赤ずいき（里芋の茎）の酢のもの・豆・コンニャク・煮物である（写真 6・7）。中でも赤芋茎の酢子はこの地域ならではのものであるという。そしてお汁もこの日は特別で、「あずき汁」なるものが用意される。お汁粉に豆腐が浮かんでいるような見た目で甘いのだろうかと思ったが、実際にはお味噌汁にすり潰した小豆が入っているような味で、甘くはなく驚いた。このあずき汁はお取り越しの報恩講でしか作られない特別メニューだが、在所の方でも苦手な人もいるらしく、かぶらの入った普通のお味噌汁も用意される。これを「一豆二かぶら」と言うそうである。

席に着くと、ご住職が大きめのとっくりを持ち、門徒の方一人ずつにお酒を注いで回っていた。ご飯をいただいている間にも、在所の女性達が「おかわりはいかがですか？」「お茶はどうですか？」と忙しく働いていらした。また大皿に白菜のお漬物があり、それを持ってきた

てくれたりもした。女性陣は前の晩から 70～100 人分の食事を用意する（当日の朝は 8 時半から集まって準備）ということで、調理場に設置されたマイクを通して法話を聞いたりしていたそうである。



(左) 写真 6 報恩講用のおとき

メニューは、赤芋茎（ずいき）の酢子・豆・煮物・おつゆ・コンニャク。

(右) 写真 7 あずき汁

手前のあずき汁は、報恩講の時にしか作られないメニュー。苦手な人のためにかぶら汁と 2 種類用意される。

おときを済ませたら、午後からの部が始まった。お坊さんたちの配置が午前（図 1）とは少しだけ違い、徳性寺のご住職もお仏壇の左側の列に入っておられた。今回は最初に、親鸞聖人を称える内容の文章である「報恩講私記（私記文）」が読まれた。これは親鸞聖人の三十三回忌に覚如上人によって書かれたもので、報恩講の時にだけ読まれることがあるそうだ。そして特徴的だったのは、おそらくこのシキの和讃の時だったと思うが、導師以外の住職たちが一人ずつ順番に立ち上がったたり全員で立ち上がったたりという動作をしながら、読む場面があったことである。その後には十二礼の節で正信偈を唱えていた。そして御明志を集めた後、同じように法話が行われた。法話の内容は、シキに書かれた内容についてや、やはり「南無阿弥陀仏」と仏様の名前を唱えることについてのお話であった。最後は午前の部と同じように恩徳讃を皆で唱和して終えた。

最後に、門徒の方々に伺ったお話などについて、以上に書ききれなかった分を少しまとめてみる。

まず、参加者の方はどのくらいの距離から来ていらっしゃるのかということについて、である。午前、法話が始まる前の小休止の際にお話を聞けた方は福井から来られたそうであった。しかし、その方は徳性寺のご住職の親類の方らしく、福井くらい遠くから来られる方は

そうそういないということであった。大抵は山中・大聖寺の手前の方から参加される門徒の人がほとんどだそう。実際、お堂の壁面に貼ってある御明志の額が書かれた紙にはところどころ出身町名も書かれていたが、見渡したところ大体が近辺であるように思われた。

次に、宝物についてである。これは数人の門徒さんから「拝んで帰りなさい」と教えていただいたのだが、蓮如上人の杖や文字の掛け軸など、パンフレットに載っていた宝物が無料で拝観できるようになっていた。お堂の隣の廊下の壁の一部が収納スペースになっており、観音開きの戸が開くようになっているのだが、このご開帳は滅多にされないらしい。写真撮影は禁止されていた。

また、門徒さんの間で組合らしきものが存在するという話も聞いた。浄土真宗のお西派である方々が組合を作り、自分の檀那寺以外のお寺の報恩講も順番に回っていくそうで、「来週（11月）15日にはバスをチャーターして金沢にも行く」というお話も聞いた。お坊さんの側では、條生寺のご住職もいくつか報恩講に出るようなことをおっしゃっていたし、また12月には門徒の各家を回る「お回り」報恩講があるので忙しいようだが、門徒さんもこの時期は互いに行き来するので大変なようである。

最後に、お経についてもお話を聞くことができた。正信偈には3つの節があり、それぞれ草譜（ソウフ）・行譜（ギョウフ）・十二礼（ジュウニライ）と呼ばれている。草譜の方が行譜よりも新しく、十二礼はそれらとは少し変わった形式であるようだ。午後の部の読経時に十二礼を聞くことができたが、十二礼というのは「故我頂禮弥陀尊（ゴーガーチョーライミダーソン）」という言葉が合い間に12回唱えられることからそう呼ばれるのだそう。7音・7音の14音でひとつの節で、「ラ ラ ラ ラ ラ ソ・ソ ソ ソ ソ ラ ラ♪」という音階が基本形となって繰り返されていたようである。（この時私は勤行集を借りて、それを見ながら聴くことができたのだが、漢字の隣に引いてある上中下の短い線が音の高低を表しているようで、上からラ・ソ・ミの音であるように感じた）。門徒の人が唱和することができるのはこの正信偈や阿弥陀経で、特に正信偈は8割の人が覚えているそう。

これらの話はお講の合い間の小休止の際や、お斎を食べる前後に教えていただいた。その時間帯は門徒の方同士でもコミュニケーションの時間のように、多くの人が「久しぶり！元気にしとった？」などと会話をしていたように思われる。そしてそのような和やかな雰囲気のまま、午後の部を終えてみんな一旦帰っていった。

## 5. 考察

ここまでで、お寺で行われている行事とその実際の例について記述してきた。実際に報恩

講に参加させていただいてまず感じたことは、「宗教行事」というお堅い言葉で表される集まりというよりもまるで親族一同が集まるお正月の場のような空気を持っている、ということである。熱心にお坊さんの話を聞き信心深く手を合わせてはいても、遅れてきたおばあちゃんの体を気遣ったり席を譲ったり、また時々ウトウトしても許される余地がある。それらを許す温かい空気が流れているのである。休憩時間には互いに世間話に花を咲かせ、調理場では役割分担をしてご飯を作る。お講や例会のときには、菅谷のほとんど全ての家の人が徳性寺に集まる。定期的にこのような場が設けられていることは、地域の人々の繋がりを確実に強めている。そしてここで見落としてはならないのは、それを引っ張る徳性寺という寺の存在があるということだ。現在でも定期的にお講が行われているというのは珍しいことであるという話も耳にしたし、実際昔より縮小してしまった行事もあるが、確かに毎月何らかの仏教行事が行われているというのは珍しいことである。それを絶やすことなく行うというだけでなく、共同お講やラジオ体操の後の正信偈の練習などの独自の行事も積極的に行われている。これはもはや単なる宗教行事に留まらず、より地域に密着した行事となっている。夏休みの早朝、ラジオ体操の後には仏教婦人会のメンバーから子供たちに正信偈が教えられる。これはラジオ体操という、子どもたちだけの集まりの場の延長ではあるが、子供たちと婦人会のメンバーのふれあいの場でもある。同世代同士だけの繋がりではなく、家族以外の大人とも触れ合える機会を持てる地域のコミュニケーションはおそらく、核家族化・少子高齢化が叫ばれる現代においては貴重なものだ。徳性寺はそういう意味では地域の活性化にも一役かっているのではないかと考える。また、比較的中高年齢の参加者が多いお講の場も、同じような働きをしているはずである。定期的に顔を合わせる機会が設けられていることは、互いへの関心へ繋がり、きっと現代問題のひとつとなっている孤独死のようなケースは起こりにくいのではないだろうか。

またこれらの行事は、TV やインターネットなどのメディアが普及している現代においても、少なからず娯楽的な要素をも含んでいると考える。お講の時に法話を話されるお坊さんは、とても巧みな話術を持っている。私のように浄土真宗の知識が乏しい者にも分かりやすく、随所に時事ネタや軽い冗談話を折り込んである法話は、例え昔ほどの娯楽としての機能は失ってしまっていたとしても、おばあちゃんやおじいちゃんにとってはまだ十分に楽しんで聴けるものではないだろうか。TV やインターネットと違うのは、コール&レスポンスが可能な点である。お坊さんは参加者全員を見渡しながら話を進め、おばあちゃんたちはそれに応えるようにうんうんと頷く。その場にいる全員が共有できる娯楽という点ではこれも大事なコミュニケーションのひとつである。

以上のようなことから見ると、報恩講が最初に記述した「ホンコサン」のようにどこか愛

着の込もった響きで呼ばれ地域の行事として人々に親しまれているというのも、自然なことであるように思えてくる。若い世代の地域離れなどの問題があることも決して否定はできないだろうが、しかし徳性寺を中心として菅谷町は深く結びついていることも事実であるはずである。単に信仰や惰性の儀式で終わらない何か、それは実際に参加して初めて感じられたことであるが、そういうものがこれからも、少しずつ形を変えながらも残っていくことはやはり大切である。

## 6. おわりに

今回の調査実習では文献の紙の上からは感じられない人々の温かさに数多く触れる機会でもあった。京都の片田舎育ちの私にとって、お講こそ参加したことはなかったものの地域の人々とのふれあいの場というのはどこか懐かしく、そしてやはり温かく感じられた。この報告書を作成することができたのは、温かく迎えてくださった西谷の皆様、そして徳性寺のご住職のご好意のおかげである。最後になってしまったが、本当に町全体を通して他所者の私たちにもあたたかく親切にしてくださった皆様に、深い感謝の意を示したい。